
ホワイトクリスマス

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホワイトクリスマス

【Nコード】

N8856P

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

「南国の魔法」から半年後のケンジとユリの話です。日増しにかつこよくなるケンジに焦りを感じるユリは…*ブログで完結後、なろうへ掲載します。

ホワイトクリスマス1（前書き）

「南国の魔法」から半年後のケンジとユリの話です。
全4話です。

ホワイトクリスマス1

体育館に気合の声が響く。

黒い防具をきた二人が体育館の中央でにらみ合っていた。

壁際でユリはその様子をじっと見ていた。

戦っているうちの一人は山元ケンジだった。

剣道を習って半年、練習試合をすることになり、ケンジも出る事になった。ユリはケンジが剣道している姿をまだ見たことがなかったので、応援に来ていたのだ。

「きえええ！」

ケンジはそう言う足踏みを踏み出した。

パカンという音がしてケンジの竹刀が相手の頭に当たった。

「面あり」

審判の音が体育館に響き、歓声が上がった。

「ケンジ、かつこよかったわよ！」

ユリは着替え終わったケンジにそう言った。ケンジは照れたように笑った。その笑顔がなんだかまぶしく、ユリは視線をそらした。

剣道を始め、ケンジの姿勢がよくなり少し背が高く見えるようになった。そしてユリに言われてコンタクトレンズをつけるようになり、髪形もユリがよく行く美容室で切ってもらうになっていた。

服もユリと一緒に買い物に行くようになり、ケンジの外見は半年前とずいぶん変わっていた。

「ケンジくん」。一緒に山田先生のところへ戻りましょうよ」

体育館から女性の声が聞こえ、ショートカットの20代後半のさわやかな女性が歩いてきた。

それはケンジと同じく剣道を習っている野中メグミだった。

「あ、彼女も一緒だったのね」

メグミは自分をにらみつけるユリを見ると苦笑してそう言った。

「じゃあ、彼女さんも一緒に山田先生のところへ戻りましょう。防具とかあるからみんな一緒に帰ったほうがいいでしょ？」

「ああ、そうですね。お願いします」

ケンジは機嫌の悪いユリをなだめるようにしながらそう答えた。

「じゃ、10分後に正門でね？」

メグミはさやかな微笑を浮かべるとまた体育館へ戻っていった。

「…あの女、なんなのよ」

「え？野中さんのこと？」

「野中さん？！あの人が野中さん？」

ケンジの外見が見違えるようになり、ユリは不安になることが多くなった。自分だけを見つめてくれるはずのケンジが急に遠くになったような気がしていた。会社ではタカオたちのことがあり社内恋愛禁止になった。おおっぴらに付き合いができなくなっていたのだが、ここ最近女子社員がケンジを見る目が変わったのを感じていた。以前なら恋愛対象外としてケンジに視線が向くことがなかったのだが、最近ケンジをちらちらと見る視線にユリは気がついていった。

「ねえ。ケンジ。剣道の教室変えることできないの？」

「?!どうして突然？」

ユリの言葉にケンジは飲んでいたコーヒーを吐き出しそうになった。山田先生のもとへメグミたちと車に乗り防具を返してから、ケンジとユリは喫茶店にきていた。

「だって…」

ユリはメグミのことが気になっていた。剣道の教室に通うようにな

り、ケンジが野中さんという名前を出すようになった。話からいつも一緒に稽古をしているようだったのでもいい友達かと思っていた。しかし今日会ってみて野中さんが女性でしかもケンジに気があることわかってしまった。今日は自分がいるから良かったものの、普段は剣道の教室でケンジとメグミが親しくして思うとイライラした。

「どうしたの？ユリ？」

言葉を詰まらせて黙り込んだユリをケンジが心配げに見つめた。いつもの優しい眼差し。

ずっと自分だけがその魅力を知っていると思っていた。

あーずっと眼鏡君のままにしておけばよかった…

ユリは自分を見つめるケンジに視線を返しながら後悔していた。

ホワイトクリスマス2

「えー！クリスマスパーティー?!」

クリスマススの1週間前、ケンジの家に遊びに来ていたユリが素っ頓狂な声を上げた。

今日は日曜日でケンジの両親は祖母の墓参りに行っていた。

2階にあるケンジの部屋で大声を出しても誰も咎めるものはいなかった。

「うん、そう。僕ってずっと家に籠っていたから。そういうの参加したことなくて。剣道の仲間でクリスマスパーティーをするんだ。僕も参加したいんだ。もちろんユリも一緒に」

そう言いかけてケンジの顔が強張った。真っ赤な顔で怒っているユリがケンジを見上げていた。

「勝手にいけば？私帰る！」

ユリは床から立ち上がると壁に掛けてあるコートをとった。そしてドアを開けようとノブに手をかける。

「ユリ！」

ケンジがユリの手首を掴んでいた。そして二人の視線が合わさる。髪型を変え、ケンジの目に前髪がからなくなり、そのきれいな二重瞼の瞳がよく見えるようになっていた。

ユリはふとケンジの瞳に見とれていたことに気がついた。

こんなにカッコよくなっちゃって！

「痛い、離して！」

ケンジはユリの声を聞くと慌てて手を離れた。

「ごめん！」

ユリはケンジを見ることなく、ドアを開けると階段を駆け降りた。

「ユリ〜！」

ケンジがユリを追って1階に降りる。

「この鈍感ケンジ！1人でパーティーでもなんでもいったらいいわ！」

ユリは追ってきたケンジに向かってそう叫ぶとパンプスを履き玄関のドアを開けて出て行った。

「ユリ」

ケンジはわけがわからないという表情を浮かべて開け放たれた玄関のドアを見つめていた。

駅に行く道を歩きながらユリはぶつぶつと一人ごとを言っていた。周りの人がユリを見るが構わなかった。怒りがおさまらなかった。

「なによ。クリスマスは二人で過ごそうと思ったのに！剣道部仲間ですパーティ！？きつとあの野中っていう女の仕業だわ！」

ユリが駅の構内に辿りつき、電車に乗るため階段を上っていると見覚えのある顔が見えた。向こうも気づいたようでユリに笑顔を向けた。

野中さんだわ

なんでここに！

「ねえ。ケンジくんの彼女さんでしょ」

無視しようかどうか迷っているとメグミが先に声をかけてきた。

「そうですけど」

ユリは不機嫌な様子を隠さずそう答えた。その様子にメグミは苦笑した。

「ねえ。彼女さん。時間ある？ちよつとお茶でも飲んで話さない？誤解してるみたいだから誤解を解きたいのよ」

少し茶色かった瞳に見つめられてユリは戸惑いながらもうなずいた。

ホワイトクリスマス3

「やっぱりね。思った通り」

メグミはブラックコーヒーの入ったカップを手に持って窓の外を見ながらそう言った。

そしてコーヒーを一口飲み、ソーサーにカップを戻した。

「ケンジくんは私の亡くなった弟に似てるの。だから構いなくなっちゃうのよね。ケンジくんもそれを知ってるから私に優しいの。他意はないのよ」

メグミはそう言ってユリの顔を見た後、再び窓の外を見つめた。

ユリは何も言えなかった。嫉妬していた自分が馬鹿みたいだった。

「そうそう。クリスマスパーティ、私の実家がやっている喫茶店で開こうと思ってるの。うちの両親にケンジくんを見せたいなあと思つて。変な誤解与えてごめんね。」

メグミは苦笑しながらテーブルの上のコーヒーカップを手に持った。

ああ、本当、私って馬鹿だわ。

ケンジのことをわかってない。

ユリは浅はかな自分が嫌だった。

「メグミさん。そのパーティ。私もぜひケンジと参加したいです。いいですか？」

「ええ。もちろんよ」

メグミはユリの言葉を聞くとパツと笑顔を浮かべた。その笑顔はなんだかケンジに似ていた。

「メグミさん。私、色々すみませんでした」

「ああ、いいのよ。私があなたの立場だったら多分同じ行動とっていたはずだし。ケンジくんもかわいい彼女持つて幸せね」

メグミさんはそう言つとコーヒーを一気に飲んだ。顔が熱さで真っ

赤になるのがわかった。ユリは思わず嘔き出した。

「咽喉が痛い。熱い物を一気に飲むものじゃないわね」
水を慌てて飲むメグミを見ながらユリは笑いが止まらなかった。

ドアフォンのボタンを押すと、呼び鈴の音がしてケンジの顔が小さい画面に映し出された。

「ユリ?!」

ケンジはびっくりした顔を見せるとドアを開けた。

「どうしたの? 忘れ物?」

「ケンジ、ごめん!」

ユリは頭を下げてそう言った。

「なに? どうしたの? とりあえず中に入って」

ケンジは眉をひそめながらもとりあえずユリの背中を抱き、家に招き入れた。

「ユリ、どうしたの?」

ケンジは俯いたままのユリの顔を見ようとしゃがみこみ、尋ねた。

「本当、私って馬鹿だわ」

「意味わからないけど、ユリはユリだろう。なんか最近おかしいよ。何かあったの?」

ケンジはしゃがみこんだままの姿勢でユリの顔を覗き込む。泣いているのがわかった。

「言わないとわからないよ。僕また何かした?」

ケンジは立ちあがるとユリを抱きしめた。甘い香りがした。

「いつも1人で怒ってごめん。誤解ばかりして」

「そんなの。いまさら わかってるよ。」

ケンジはユリの背中をさすりながら苦笑した。ユリの性格は分かっていた。そういうわかりやすいユリだからケンジは好きだった。自分と違って自己主張をはっきりとするユリ。対極の存在だからこそ惹かれたに違いなかった。

ホワイトクリスマス4

クリスマスイブは雪が降った。

今年は降らないと思っていた雪だった。

メグミの実家の喫茶店はこじんまりしたところだった。

今日はクリスマスパーティーということで、メグミの近所の人や剣道仲間が集まっていた。店内にはクリスマスデコレーションがされていて、窓にはサンタクロースやトナカイが雪のような白いスプレーで描かれており、クリスマスリースが壁に飾られ色とりどりのリボンや飾りが付けられていた。そして少し小さなクリスマスツリーが可愛らしく飾られていた。

「ユリちゃん！こっちこっち！」

クリスマス定番のケーキのブッシュ・ド・ノエルを抱えたユリをメグミが呼んだ。

ユリの提案もありケンジ達はパーティーの始まる少し前に喫茶店に行き、準備を手伝っていた。

毎年恋人と祝うものと決めていたクリスマスなのでこうやってワイワイとするクリスマスも楽しかった。

「ああ、俺も来年はユリちゃんのような彼女を作るぞ！」

「失礼ね。私はどうなのよ！」

剣道仲間のじゃれ合いが店の中に響き渡る。

「あ、ごめーん！お酒がなくなった。ケンジくん、ごめーん。お店すぐ近くだから適当に買ってきてくれない？」

「いいですよ」

メグミに言われケンジがソファから立ち上がる。

「あ、私も一緒にいく」

ユリはエプロンを脱ぐとそう言った。その手にはバッグが抱えられている。

「メグミ。酒まだあるぞ。ワインも。なんで？」

二人が出て行った後、村野タダシが訝しげにメグミに聞いた。

「あ、あったのね。ああーいいわ。いっぱいあったほうがいいし」

メグミは笑いながらタダシにそう答え、窓の外をみた。

「あの店だ！」

酒屋を見つけ、行こうとするケンジをユリは手を引いて呼びとめた。

「これ、プレゼント」

「え、ありがとう」

渡されたのは透明な袋に包まれた手袋だった。

「手編み？ユリが編んだの？」

「うん、まあね」

ケンジは嬉しくなつて袋を開けた。赤と黒の模様が入った温かそうな手袋だった。

「今つけていい？」

ユリが頷くとケンジはつけていた手袋をはずし、ユリの編んでくれたものを両手につけた。

「あったかい。ありがとう！」

ケンジはユリを抱きしめた。すると持っていた透明な袋が落ちる。そして風に乗って雪とともに飛ばされた。

「あーあ、ラッピングペーパー 高かったのに」

ユリは苦笑しながらそう言った。すぐ近くにケンジの顔があった。

半年前とは違う男らしい顔だった。この半年で彼はすっかり男になつていた。

今ではユリのほうが彼にドキドキすることが多くなっていた。

「ユリ、好きだ」

ケンジはユリを見つめそう言つと頬を両手で包み、キスをした。それは今までのキスとは種類の違うキスだった。

「け、ケンジ?!」

びっくりするユリにケンジはもう一度キスをした。頭がぼうつとす

るようなキスだった。

すっかり男になっちゃって。

まあ、いいわ。

ケンジは今までの男とは違う。

私自身を好きでいてくれるから

街はクリスマス一色だった。

家族づれや、恋人達が思い思いに通りを歩き、クリスマスソングが店の中から聞こえてきた。

少しだけ照れたようなケンジの腕を掴み、ユリはお酒を買いに行く酒屋に入ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8856p/>

ホワイトクリスマス

2011年7月12日12時09分発行